

低温・日照不足・長雨及び急激な気象変化(高温)に対する 技術対策について

令和2年7月20日
農業水産振興課

1. 6月中旬～7月上旬の気象概況と今後の予想

奈良県では、6月25日頃から、降水量が多く日照時間の少ない状態が続いています。

【奈良地方気象台の気象観測値】

旬別	平均気温(°C)	平年値	差	階級区分
6月中旬	23.5	21.9	+2.1	かなり高い
6月下旬	25.1	23.0	+1.6	かなり高い
7月上旬	24.5	24.6	-0.1	平年並

旬別	降水量(mm)	平年値	比	階級区分
6月中旬	163.5	62.3	262%	かなり多い
6月下旬	52.5	87.5	60%	平年並
7月上旬	185.0	65.4	283%	かなり多い

旬別	日照時間(h)	平年値	比	階級区分
6月中旬	29.8	50.0	60%	かなり少ない
6月下旬	51.5	33.8	152%	多い
7月上旬	18.0	45.9	39%	かなり少ない

(奈良県農業気象速報)

日照不足と長雨に関する奈良県気象情報第1号(令和2年7月16日奈良地方気象台発表)より
6月25日～7月15日の 日照時間 38.8(h) 平年比 44%

降水量 304.0(ミリ) 平年比 200%

また、近畿地方の向こう1ヶ月の天候見通し(7月18日から8月14日)では、期間の前半(7月18日～31日)は、雲が広がりやすく、日照時間の少ない状態が続く見込みと予想されています。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)＞

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
【気温】	40	30	30
【降水量】	20	40	40
【日照時間】	40	40	20

(7月16日大阪管区気象台発表)

一方、期間の後半(8月1日～14日)は、気温は平年並か高くなり、急激な気象条件の変化が予想されますので、農作物の管理に注意が必要です。

また、急な高温条件の中での農作業は、熱中症になりやすくなることが予想されます。高温高湿度下での農作業は、決して無理をせず、十分な水分補給や休息を心がけ、単独での長時間の作業は行わないように注意してください。

2. 水稲

穂いもち病が発生しやすくなるので、降雨の合間をみて、農薬使用基準に従って防除する。すでに葉いもち病の病斑がある圃場では必ず薬剤散布する。

3. 大豆

(ア)降雨後の滞水がないよう、排水対策を徹底する。

(イ)雑草の発生を抑え、根張りを良くし、倒伏を防止するため、降雨の合間をみて中耕・培土を行う。

4. 野菜類

<イチゴ(育苗)>

(ア)多湿条件では、炭疽病の発生が懸念されるので、定期的な防除を実施するとともに、栽培環境の改善(雨よけ、灌水方法、通気など)に努める。もし発生を確認したら周囲を含めてビニールで覆い、ゲッター水和剤を散布する。

(イ)気温が低いとうどんこ病の発生が拡大する恐れがある。春に発生が見られたところでは、特に注意する。葉かき後の予防散布を中心とし、発生した場合は、治療剤を含めた体系防除を行う。ただし、同系統の薬剤の連用は避ける。

(ウ)天候が回復する直前に寒冷紗等による遮光など高温対策を行う。また、急激な気象条件の変化(高温)においては、かん水量や回数を増やすなど、水管理には特に注意する。

<ナス>

(ア)日照不足などで株が軟弱徒長、過繁茂の状態になるとうどんこ病の発生が助長されるので、定期的な防除を実施するとともに、整枝等栽培環境の改善に努める。

(イ)褐色腐敗病が多発する可能性がある。被害枝葉や被害果実は伝染源となるので、早期に圃場外に持ち出し処分する。また、病原菌は水により伝染するので排水性を確保し、降雨後は薬剤散布による予防をする。

(ウ)光量不足になりやすいので、整枝、摘葉を適性に行い、採光をよくする。ただし、降雨直前及び降雨中は整枝をひかえる。また、樹勢が弱い場合は、果実を若どりし、着果負担を軽減する。

<ハウレンソウ>

(ア)ハウレンソウは湿害に弱く、降雨による地下水位の上昇や浸水は、生育低下や土壌病害の発生を引き起こすことから、ほ場の排水対策を徹底する。

(イ)曇天や降雨が続くと、べと病の発生が多くなり、発病後では被害を抑えられないことから適用農薬を用いて、発生予防に努める。

(ウ)また、ハウレンソウケナガコナダニによる被害も多くなるので、アファーム乳剤とカスケード乳剤を用い、農薬使用基準に従って体系防除を行う。

<露地野菜>

(ア)ほ場の排水対策を徹底する。浸水や冠水を受けた場合、生育低下や土壌病害の発生を引き起こすことから、長時間浸水しないようにする。また、液肥の施用により、草勢の回復に努める。

(イ)病害に侵された株は早めに圃場外に持ち出し伝染源を除く。また、降雨の合間に薬剤散

布を行い、病害の予防に努める。

(ウ)圃場準備は過湿時に無理に行わず、土壌が適湿な状態で行う。また、苗の植え付けが遅れた場合、定植後の活着と生育を促すため、液肥の施用を行う。

5. 花き

(ア)圃場の排水溝を整備して排水対策を行うとともに、浸水や冠水を受けたほ場では速やかな排水に努める。

(イ)停滞水により根の活力が低下し、養分吸収がわるくなっているため、必要に応じて液肥を散布して樹勢の回復を図る。

(ウ)下葉の除去や整枝(切り花)、鉢の間隔を十分にとる(鉢花・花壇苗)などにより風通しや採光をよくして、病害の発生や軟弱徒長の防止を図る。また、必要に応じて適用農薬による防除を行うとともに、感染源となる罹病葉や罹病株は早期に処分する。

(エ)露地切り花で植物体が倒伏しそうな場合は、支柱の数を増やすなどして補強する。

(オ)収穫物が濡れている場合はムレ等による品質低下が懸念されることから、通常よりも風通しをよくして保管する(扇風機の利用、バラして保管など)。

6. 果樹

(ア)圃場の排水溝を整備して排水対策を行うとともに、浸水を受けたほ場では速やかな排水に努める。

(イ)成熟期が近づいたら食味を確認しながら収穫時期を判断し、適期収穫を心がける。

(ウ)病害が発生しやすくなるので、発生があれば天候の回復を待って農薬使用基準に従って病害防除を徹底する。

(エ)病害果や腐敗果は伝染源になるので、見つけ次第速やかに除去しほ場で処分する。

7. 茶

病害が発生しやすくなるので、発生があれば天候の回復を待って農薬使用基準に従って病害防除を徹底する。